

特 42

946

伊 達

顯

秘

錄

女

子

子

娼院喃誌

第十三號

伊 達 伊 達

娘

節

用

子

兒

雷

也

(定價金三錢五厘)

本誌壹冊定價三錢五厘
 十冊前金三十一錢五厘
 一ヶ月前金七十錢
 前金領收ノ分ハ發兌毎
 ニ配達可致候但シ市外
 ハ別ニ郵税申受候且前
 金相切候共御買止メノ
 御沙汰無之候得ハ引續
 配達可致候也

明治十六年七月十日
 六月御届
 同十七年
 二月十五日
 日成刊

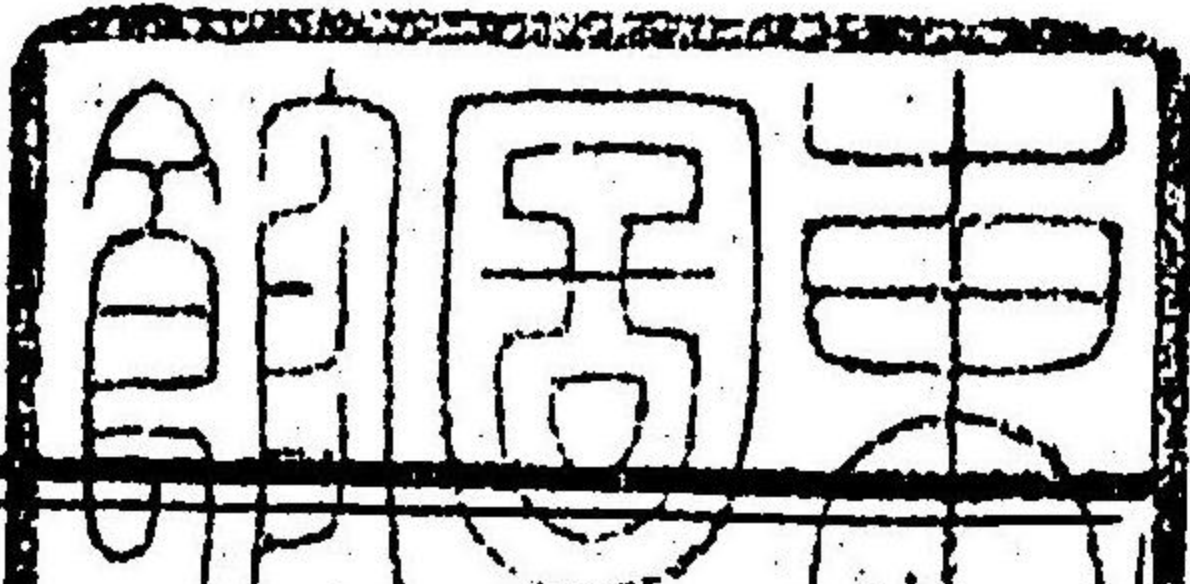
校訂者 長野縣士族 福田銀太郎
 同縣下東筑摩郡北深志町 四百五十三番地
 出版所 吟天社
 同上新甲五十六番地
 松本本町二丁目 高美甚左衛門
 發賣書林

聯盟會設立廣告

詩歌文章ノ學ハサル可ラサル復言フヲ要セス只憾ム僻遠ノ地良師友
 ニ乏クシテ切磋ヲ得サルヲ依テ今般在京ノ諸家ト計リ聯盟會ナル
 者ヲ設ケテ大ニ斯道ヲ琢磨シ旁ヲ其評撰添削ノ依頼ニ應ス
 添削料左ノ如ク定ム
 一五七絶一首一錢同律二錢古詩一篇三錢漢文四百字以下五錢以上十錢與假文一行廿五
 字十行ニ付四錢歐文三行以下十錢和歌一首五厘俳句都々逸共五厘
 一草稿ハ十日毎ニ返戻スル者トス但返稿料トシテ別ニ金二錢ヲ要ス
 一添削料ハ郵便切手ニテ送ラルモ妨ケナシ
 一傳記序跋碑稿等ノ撰文并揮毫等賜托ニ應シ諸名家ニ紹介ス可シ
 一詩歌俳句等ノ撰評ハ詩百首ニ付三十錢歌十五錢俳句都々逸ハ十錢
 信州松本北深志町一番丁新甲五十六番地吟天社内

明治十六年十二月

聯盟會



昔ッたれが有ますガアノね雪さんに進ましてと悪ふござい升ウへ 金ナニ悪くも糸
 危ガ如彼大死する者に遺よりの取て置て坊よ遺ぐみ、小二、夫でも此子よの餘り甘く
 ツと悪ふござい升誠又甘露梅も有ましたらうら一所よしとお祖父さん此所へでも進ま
 せうか 金馬鹿ア言ゆる石部金吉鉄兜と云ふ固以内へ花街から貰ふ物が出さる者
 かなトハはさく小三「チホ、ハ、誠然で有ましたら夫然とアノね雪さんは賑か
 美しくね成ささいましたらチ 金 然サまんざらでね危なさを未だ一向の娘様さ
 り何處れか人と比べての迎も及ばねへ論あしよトもびれさ死で小三ののはとちよ
 又其様な悪くしいとと夫でもモウ女といふ者は子持に成と色氣も無かりはまらぬ者
 で有ます糸へ 金 違へ糸へ色氣も無つても汗氣が有は澤山ノウは、アト、こゑとか
 ばもふ乳「チホ、ハ、ほんよ左様でござい升私様は色氣も汗氣も無つてとんけま
 死だま せんが御新造さんあどの是くらが肝心でござい升 小「チヤ嫌よ夫でも變者で子供
 にかまけると意氣地かくト、ひさくつて我身がぐ染アヒみたと思ふ様よ夫だ

から座敷へ出てもね客が皆々私れ事と子持山姥は何れと云か私も夫を矢張通して
 斯云唄を唄ツと遣よ「若ん時は二度いなり有頂天まで上り詰め親も苦勞を掛るはば
 ろよ子と持て知る親れ恩は深い者はあめわいあ」
 子にや易らさぬんに世れ中に子は可愛者とあり」と唄ふも中よ胸氣お客
 と手前様な者にやア碌な子と出来やア先へ子とぬぬ者之尻と放るも出来るは何
 れどぢらす人が有うら私も亦負ぬ氣で味附を上るじやア無けを可愛人と大骨を折
 く拵へ子だから出来合の子と些と違ひ升と云から色氣が無ッてい」と云く呼で
 下さるうら可笑れサ 金「へん飛だ機振の云立だほんに此頃じやア敷層口が違者お爲
 たよ道理で已も言やくらさるト
 金「又其様な戯ら計りどうく起して仕舞あすつた折角熟睡し付ました者」と金
 可とる餘り午睡をすと夜よ成て目を覺くら噪しくツと眠さねへ 小三「お前さんで
 は有まいし 金「ナゼく 小三「お前さん能出来まいと貴郎何時でも晝迄つた風く

はお起なすツと宵ツをど
 を成るものと 金「何れ強
 ん起しても既寝倦の時分
 ぶのうアレ機嫌のい、事
 を見な已が顔を見ちやア
 んあ〜笑ふせぬ、子か
 く〜坊ちやんだどと
 金之助顔 コリヤれツか
 とあでつ、コリヤれツか
 アの様お浮氣に爲ちやア
 いらねをぞ 小三「チヤ怪
 からね（私より貴郎に似
 たら親も世話計を焼せま





度よふござり升あチャ旦那出なさいまー此間は間違まして一向お目お懸りません
 金「やんお爾サ何ごう急に寒く成たチモウ此様お炬燵と首ツ引とする様お成ちや

せきといひながらだれどお竹や何をしく居り坊が起
 たりら些と抱てね呉よ 下女「ハイハイサアくね坊
 さんお出なさいましアノ乳母さん私やア今ね坊さ
 んを連申て惠迎院へ行て遊せ升りらアノ齒入屋が來
 たりな少し下駄の齒を入させくお呉さいよ 乳ア
 イく夫いゝがね泣きすったも早くね歸よ怪我を
 させ申様おね仕よ 下女「アイ左様お行て參ま
 せうト 結ゆらひがみのねたぼが來ると見て
 やねさぼさん丁度好時間だよサアね上り坊と今遊び
 に出したうら此間一寸と結てね呉な たぼ「夫丁

アムけねへれサ たぼ「チャね前さん其様お事と被仰るが巨燵と云もれり能もれで云
 に云さぬ樂まが有ますよねへ小三さん 小三「何ごえねたぼさん變お事を云でさぬ
 人比鼻と摩る様お私等ア其様お事は嫌ひさ 金「コウおたぼさんね前も餘程好物家ぶ
 子成程一寸淫褻よとまんざり悪く糸をやゆさ冬は色事ハ巨燵で出來るやぼが幾個も
 有もれサ 小三「モウを笑止もさぬ其様お説話のモウ止さぬ氣障有ますはチサ
 アねさぼさんアよ煮花が出來るから其内結てね呉糸糸へト 是よりねたぼは小三
 ぼ「小三さん昨日はアノ何處へお出ますつたる 小三「昨日は舟で酉ね町を
 行たの糸夫だから例よと髪がだいさしよ爲たれさ 金「ナコ昨日之舟へ行たの髪が
 顔きたとそいばは些怪しい 小三「チャく旦那が何か被仰るよ 小三「又ね妬が始り
 さ珍らしくござんません 金「是が妬糸へでどうするもれり番人ねねへ生魚だもれ如
 何お人が釣か知やアまねる 小三「チャ飛ぶ宛を受るもんだ飯令とん釣人があつて
 香餅をどんく蒔ばとく曲つた針もや懸せません 金「憚とちがら私は 金「へん飛ぶ

所でど死む奴よありあが芝居をする様ホト くらウツくゐるうち 小三「ばアヤア茶
とまだ出来ぬる 乳「ハイやうく出来ました 小三「そんなら一ツ上やぞト 金五郎
はをとりてれたば 金「是は憚りさまモウれりやいなさぬ升おはんは旦那へ此頃
にも伺いで出す 顔見の如何でござと升 金「私共此間くら爾云々居れさ小三も見てへと云うら一所
お出さ四五日の中よ 金「夫は有難ふござい升樂みも致して居ますよと 金「先川の
わかいもの「モシ小三さんへ此中のお留守居衆が夕方行から口を懸て置て呉ると云
入りましたり 小三「チャ左様へ今日はお店に乘れ約束も有が此方の夜が更るの
て参りましたよ 小三「断つて前の方へ参らうよ わかい者「そんなら後程御案内と致しませうトわりの
立ち 金「たば「とを私共参りませう左様なら小三さん又明日と挨拶して髪結れたばの歸
りけり

第五回

小三は糸川より口が懸てし故鏡臺取出し化粧は紅粉ひも深くのせせ一寸と化粧で櫛

けらるべいと理否明白に述べられしかば兵部と巧い腰と折られ大に辟易し彼是は御
家は爲且の幼君は大切さ貴所踏へ所有て取捌るゝ上の我迎も云分なし逆最不興氣よ
退出しける斯て松前鐵之助の不慮に御前を遠ざけらる獨情々思案と廻ると我斯の如
く無實を蒙る事口惜も次第さまで天道と正直さまで一度と明とと晴さんかれ共只氣
遣の幼君は御身の上御側も有くせよ淺岡殿は心遣ひ今斯なとくと必定片腕を失ひた
る心地せられん且恐人共如何ある謀計と巧むん是は以て心安うら老併畫は間の然れ
みは事も有ト只心元な死之夜中れ事如老人知す夜々宿直し奉りらんにはと覺悟を極
先多年召仕し若黨も言付自分の部屋より御殿は椽下へ閑道を通じ毎夜人知す御寢
所は下に這入息を殺しく守護し奉つり御聲音の洩明ゆるとバ只樂ととしく怠りあ
宿直する忠義は程を類ひなき逆徒等これを知バ又もや難儀に及ふべきと終小知者
かりしと實も天の加護と知られたり

渡邊金兵衛菓子を獻する事 並 名月は夜安藝が館へ盜賊は入る事

淺岡は松前と遠避くまで大死よ力を落せと忠義の心は少しも撓まず愈々油断なく君と
守護し一寸は隙もなかりける或時渡邊金兵衛奇麗に仕立たる菓子折と持参し此菓
子は拙者が寸志随分と吟味仕ゆりゆり幼君は御慰みに差上られよと出しけきバ淺岡
聞ていふ様去頃毒害は曲事ありし後之御食事に念と入る我心遣ひ大方ならず依て他
よと来る物一切御覽に入ざるは其方ふも御存じあるべし斯る時に我親類とて金兵衛
殿其方よと食物を上ぐるハ無遠慮ならずやと咎めけきバ心よ一物ある渡邊赤面し
と折と持立んとするハ淺岡押へて併し其許の御深切披露の爲なり逆折は蓋と開くお
奥に飼るハ神是と見て尾と振く淺岡に飛付ける淺岡驚らる菓子折と打盜せしハ神と
悦びくニツ三ツ喰けるに忽ち狂ひ廻り血と吐き反返りく死またり淺岡見く氣色を變
を金兵衛殿那にても吟味は御菓子に候のと云けれバ渡邊彌々詞なく狐鼠く宿所へ
歸く病氣と稱し暫く引籠り居たりける茲ハ仙台表伊達安藝が方よは家例とて例年八
月十五日は夜の家來下々迄残り老集め酒宴と張り上下の隔絶なく其夜計りと無禮講

お家内賑敷と悦びたるが今年と殊更天氣例に勝る快晴にて風もなく又一點は雲もな
し一入酒宴興を増し候ひ中は書院次は閉下部之廣庭に越と敷並べ思ひくハ寄合く
夜更る迄汲交し宿所へ歸るも有は部屋へ行て正体なく伏倒るハも有り主宗重も敷盃
は酔お奥座敷に寝所と設け蚊帳を釣かせ休み家内寂寥と鎮まり郎之虫の音と争ふハ
みなりし時に寝所は庭は薄押分け眞黒に打扮頭巾に面を包とし大ハ男立出様へ道
上障子と徐と開しが憶する心や出たりけん障子我多くと鳴出たり寝たる間も油断
なき安藝宗重物音に目と覺一密に窺見をバ限るは月に人影映りけきは安藝少も騒が
ず夜着は裾より密と蚊帳は外へ拔出身を縮光臥たる体に持成居たりしハ彼者之を夢
にも知らず兎角しハ障子は内入と等々水は如き刃と提て蚊帳越ハ夜具の上よと
鳴と実所を宗重片陰よと踊出て兩足掻て刀を奪取り拙付け汝盜賊御参るれ眞直又名
乗くと責けきバ家内は上下是と聞付目と摺り馳集るハ彼曲者頭を上げ口惜くも仕
損じふり死する共名乗まじとハ思ひしハ盜賊の汗名と免き度きバ其實を白状せん我

こそは片倉小十郎が家來松井軍兵衛と云者ありと答へければ安藝聞て我片倉主従に
遺恨は覺え更になし何故斯る狼藉及びしぞと云ふ彼者暫く口と嚙み居りし口
々に中せしと責問れ今は何との包み中へ主人小十郎近年貴公は權威と譽はれ
憤止時亦く伊達安房殿と密談は上何卒まで貴公を殺さんとせざるも假令無念は月日
を送らるゝ事請代は家人は身として其体見に忍びず命を義と替へ斯忍び入るる程
も亦く生捕るゝの運は盡なり疾々首と刎られよと勇しげに答はると安藝寂々聞て呵
々と打笑ひ成程汝財寶と食るは盜賊に非る片倉が家來とハ大になる偽り問詰りは
白狀に謀計虚顯より追々は實事と白狀せんと來家に云付縛せ置て早速書面と以て
安房小十郎を右に旨趣と知せければ兩人も驚死安藝の思慮深死と感はける

逆徒等重く安藝と計ふんとする事

茲に又原田甲斐は安藝小十郎と退けんと種々に謀略と運ふすと雖も天は許さざる處
毎度仕損じたるが元來無双は強懸おれば愈々秘計と廻らし今村渡田等四人は目付

程なく一村の目目近に草に家あり軒端傾きて見ゆれと狭うらせ入口と覺し死
所は竹枝折戸一枚建てあり松平は兩女を門に待せ置て枝折戸開て内へ入止宿を囑
みければ三十歳ばうと女此家女房と見えたるが走出て松平に向ひ幸ひ道行旅人
は宿借侍れば泊り給へとすけと松平と嬉くて梢と操を呼入つゝ洗足は湯を盥へ入て
替るゝ足を濯すば主れ女は圍爐は澁茶など進先て三人と焚火して待遇ければ梢
操の漸くと人心地付く少し安堵は思ひをなしぬ主従三人の圍爐に近付ば先に止宿し
旅人は六十六部替女の坊二人は外合宿なければ心落着操は懐より幼子出して乳房
を含ませれば松平と梢は肩と揉みとす主れ女と粥を炊て三人に夕餉と進先六部替女
おも勤むれば薄き蒲團を思ひくの旅人お渡して勝手次第お臥給へとて主の女は本
家の方へ入にける程なくして表より歸り來る者ありれ險くと呼聲に主れ女走り出
見れば夫は鎌平あり時と鎌平は險と連立内に入て旅人に思ひくは挨拶してけるが
梢操等三人を見て悄悄と本家入り頼て外れ方へ走出傍は松陰に蓑笠着る人お耳



語と久しく二人連立裏口かふ本家の方へ這入々々斯く其夜も五更に鐘響けれ
 ば梢操は主従三人襖は薄に待遇も旅疲れもや法々と寝入けるが何時かの此夜も明に
 らん廊庑に方に女は聲朝飯炊く音すれば泊まれば者共起出し宿れ如く銘々に朝飯と
 勤むるゆる各々給へて結東整へ宿錢置て六十六部替女は妨此家を出て行おけり彼れ
 三人も式に如く計ひて脚半の紐締りよき旅装さへ女連には珍一けき時に此家は女
 房に險操が稚子を抱さしと見と愛しく居と見えしが其子と忙手く搔抱さ本家と指く
 走り入る夫と見より下郎は松平續て入んとまたる時向ふは障子と亮然と開け小兒を
 片手に引摺み白刃と掲げ立出る男形を續て鎌平は險に二人も各自に刃物を携へて立
 出梢操を追取圍く其時稚子を捕へ一男聲を立枝之進が妻梢操は二人久しぶりあて違
 へりさし聲掛られて梢と操顔打守とく目よ角立ヤア龍卷荒九郎汝を尋糸に旅路に辛
 苦良人杖之進と撃て立退御家は重寶風吹れ茶器といふ半よと操が引取所夫須磨太郎
 をも手に掛し極悪人と詰寄二人松平は二人を護と鎌平は險と討取んと一刀抜持扣る

居る荒九郎は打笑ひ姦しめ、股婦女等枝之進と追殺せしも、須磨太郎と手に懸し、も皆此龍巻荒九郎あり、仇敵と規ふも、武士の妻我に手向ふ其時は、是此種兒を唯是一突屋敷あり、在し其時、うら操和女に焦せし、我を靡けば、母も樂サア返答は如何、みやと罵る中に懸路れ言葉近寄んに、之稚子と人質とせし荒九郎三人顔を見合て拳を握り齒と切之腹立涙、吳にけり操之漸々頭と上げ其子を餌に從へと言れて返辭がされ、よりの母子れ手前恥か、いやと情と合て荒九郎が顔打守れば、荒九郎顔色少し和げ、其之如何、あ、卿が言葉此子と一旦歸一遣んが眞實心、よ從ふかといふ時、操は稚子と先欺し取て松平お渡し手早く刀と抜放ち龍巻に切之掛をば、荒九郎猿臂と延し操を捕之動かさず、夫二人先を片付よと言辭け下よと鎌平と梢と撲地と白眼、今も其名は鎌平と名乗も變ぬ、其以前之荒九郎様、下僕にく目那れ下命、枝之進と打放せし、此日頃、且那れ劍術と輕蔑し、る應罰此處まで恰好殺さきに來り、大白痴者、觀念まると切之掛をば、梢は無益の問答な、其人れ仇讎と鋭き太刀先、松平は二人れ身れ上彼方、此方と心を配れ、鎌平が

女房れ、險物を、も言せ、庖丁にく切之掛、る、刀をも、丁と受留め、踏く所を、松平、際さ、せ、れ、險が、肩頭、丁と切る、鎌平、の、又、梢と二人、庭へ下立、戦ふた、と、夫とば、少しも、目に、留、荒九郎の、夜、刃、五郎、操の、襟、髪、搔、掴、み、庭に、敷石、を、押伏て、聲、振、立、サア、是、か、ら、と、我、隨、意、靡、け、ば、稚子も、汝、も、幸、福、否、と、吐、せ、ば、二人、共、愛、目、を、見、する、返、辭、を、ま、ろ、と、鋭、死、言、辭、松平、と、稚子、を、懷、み、せ、し、が、た、險、を、ば、疊、掛、て、打、と、死、に、稚子、を、取、落、す、叫、然、と、泣、出、す、聲、聞、付、夜、刃、五郎、の、又、稚子、と、拾、取、り、刀、を、握、け、泣、入、子、を、操、が、目、前、へ、突、付、て、如、何、ト、や、と、言、聲、は、虎、れ、嘯、る、に、異、なら、せ、又、傍、に、の、鎌平、が、刃、の、閃、光、く、電、光、石、火、敵、ひ、兼、し、梢、が、命、數、既、に、危、死、其、所、へ、表、れ、敷、け、中、より、し、て、一、條、れ、矢、飛、來、て、鎌平、が、右、れ、肩、へ、八、止、と、立、河、み、叫、と、一、聲、鎌平、は、後、又、動、と、倒、さ、け、り、是、は、不、思、儀、と、呆、る、梢、又、夜、刃、五郎、も、切、て、掛、さ、ば、小、瀬、お、奴、と、大、刀、を、梢、が、白、刃、を、受、止、た、と、此、間、も、松平、は、お、險、を、漸、々、と、討、取、て、止、死、刀、を、刺、ん、と、す、夜、刃、五郎、之、隙、間、も、さ、く、梢、と、操、が、切、掛、る、を、物、と、も、せ、せ、終、り、の、梢、が、刀、を、打、落、し、操、が、刀、を、奪、ひ、取、り、梢、を、足、下、よ、く、踏、と、踏、へ、て、動、入、る、と、徐、々、と、操、が、髪、を、掴、み、左、れ、足、も、て、泣、居、たり、し、稚子、を、遙、く、蹴、退、け、大、刀、

を取直し一人々々片付吳んど既に操が首と刎んどすきは又もや最前は敷れ中より
矢一枝飛來て夜刃五郎が刀持たる其肩頭へ飄と立夜刃五郎の痛手は堪らぬ刃を持た
る儘又背後は方へ仰倒たし梢操と婿さゝ矢は飛來りし敷を覗ひ何者もやと思ふ内松
平はね險れ止を刺て庭に泣居る穉子を抱取し操は波を其時已前竹藪より雀五六羽
波羅々々と飛立しが頼で竹垣をめぐりと押境り弓と手を持ち片手は餘る矢を一
條携て徐々と此所へ歩み寄り操は上座を泰然と坐せば梢は大きき驚死し顔色も
て此と不審あり高砂弓之助殿此邊隅へ來臨んどの心得せども時操も言辭を出し兄
君は去年中君れ心も適の事とて御暇もあま給ふ良人れ横死父御れ不慮又高砂は家
之斷絶其悲され千辛萬苦御身に上は恙なきと賣てもれ妾が歡喜と述る傍ら松平は身
を屈め復讎は御供して出たる甲斐も今日此處まで荒九郎も出合勝負と喜ぶ敵は手強
さど詰るを半開きぐり弓之助は三人も向ひ我今日しも此鎌平は詮儀はきて來りしと
見れば打合ぬ太刀音動靜を見んと竹垣も身を忍び窺ひ見れば梢殿と妹は操危急と見

るより鎌平を射斃しぬ敵と現ふ荒九郎急所を除て射て遣んと敵を計りて斯れ通る危
ふかりさど喜ぶ面色是ぞ信濃は更科小武勇れ聞え高砂の弓之助とて隠るなれ劍術勇
力すさまじ壯士さぞと知るきたり時荒九郎は夜刃五郎と岫然と起上り身も立
る矢と投り捨本家は方へ逃入たり弓之助の切齒をさし續て入んとしる所一道は白
氣立上り陰々ときと四方も辨たず流石は弓之助も途方に呉一が復元れ如く晴渡りけ
るまゝ弓之助の三人に向ひ彼奴に不測は發氣立は心得せ一回彼を見通せども天誅來
る時と必と已が手に捕へん梢主妹は操此鎌平之枝之進殿を手に掛し下僕は鎌平敵れ
一類止めと刺て亡靈も手向よりしと言る言葉は下よりぞ梢操と走寄り鎌平に止光の
刀七頭八倒苦みしと心地よくまを見くけり松平とお險と鎌平が亡骸を傍れ古井へ打
込けり弓之助再び座に直りて申けるは我去年國許を出立せしは大股更科左衛門殿よ
り私に命を承りし故と不興と家中を之宣言せしとけと筋に語を聞せなん家老松枝
之進暗殺せし其子須磨太郎大切茶入と奪と其身も横死其と皆龍卷荒九郎が

所爲といふと具に殿の御状通我隠棲を報道ある故仔細は残らば聞知たゞ此の圖らざ
り元姫松家の大變をよに縁組む妹は操稚子抱へて敵打男子まさりけ梢ぬし慣ぬ旅路
お出ほふんと思ふばかりに詮方ある何處を的お捜すふんと思ふ内女はのどけ復讐救
援せよと又御内意嗚呼有難き殿は御心又二ツには九州にて亡失たる尾形左衛門は遺
子あるよし風聞れみよく何處に在や行方知せず此殘黨を捜出せと嚴命を受け信濃を
立しと去年の事今歳も最早霜降月少しは由縁と求めつゝ此越後へ移住妙高山は麓谷
川村に住居し樵夫獵客となし弓矢を負ひ日々山より山に入り獲物を取暮す内此
麓村に筏と下し芝舟を乗る者あり名を鎌平と名乗よし人々風評は近元頃信濃より來
しと聞よと心裏は首肯く若や仇敵は荒九郎あふんかと密りに來て其面と見れば龍
巻が下僕鎌平おと彼奴引捕へて詮議とせんと來かゝりたりし今日に頓末と語ると聞
く主従の安堵は思を爲しよける弓之助は又云や久敷達とぬ懐愛さに我隠家を伴ひ
行はれし仇敵と尋る手段徐々と商議やさんと弓杖付く弓之助先へ立月、主従を伴